
俺と貞子（オレサダ）

走る地軸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と貞子オレサダ

【Zコード】

N7282D

【作者名】

走る地軸

【あらすじ】

ひょんな事からのろいのビデオを手に入れた主人公と、ビデオから出てきた貞子の謎な物語。

呪イノリテ (前書き)

この物語はリングのパロディ？です。

疑問文になるくらい、原作のイメージを壊しているので、原作のイメージを重視する方は、読まないで下さい。

作者は原作を読んだことありませんので、設定等、原作とは違う所が数多くありますが、いつその事良く似た別物と言うイメージで見てもらえると助かります。

呪イノビテヲ

彼女が来て一週間がたつた。

いい加減働けと思う。

事のはじまりは、こうだ。

友人が呪いのビデオとやらを俺にくれた。

友人曰く。

「今時、VHSはねえよ、お前持つてたよな？やるよ。本当に元貞子
出てきたら。教えるよな。」

まあ、俺は呪いなんぞ信じてないが、興味はあったので見ることに
した。

それが、全ての間違いだった。

デジタル放送のハイビジョンプラズマTV薄型に井戸が写る。

有名なあのシーンだ。

井戸から長い髪の女が出てくる。

なんかやばい気がする。

女がはいつくばって、じつちへ向かってくる。

なんか、部屋が涼しくなってきた。

そう、彼女はテレビから出てきた。

やべえ、金縛りつて奴か・・・・動けない！

ケ川！！！きことケ川！！！きこ

ヒテオカギニ川ギニ川言ニテる

あーこれは、絡まつたな。家のビデオテッキ古いし、当分クリーニングしてなかつたからなあ。

あ、TVから出てる彼女、上半身だけ出てきて引っかかるジタバタしてる。

金縛りとけてるけど、面白いからもう少し見てよ。

30分後。

なんか、睨んでくる。怖いからもう少し放つておこう。

1 時間後。

なんか涙目でこっちをみてる。あ、以外と可愛いかもしけん。

「助けてえ」

仕方ないので、ひつぱつてやる。

俺が手を貸すと意外と簡単に抜けた。

「…………」

沈黙がきまずいので声を掛けてみる。

「確認だが、お前、貞子だよな？」

「くり。

頷いた。貞子らしい。

「じゃあ、俺一週間後に死ぬのか？」

「くり。

どうやら、死ぬらしい。

つて、死んでたまるか！！

ガリガリガリキュルキュルプシュー

あ、デッキが煙ふいた。

「嫌アアアアアアアアー！！」

突然叫びやがつた、こええ！

なんか、TV画面にすがり付いてる。

「もしかして、帰れなくなつたとか？」

「へへ。」

涙目で頷いてくる。

「さまあ見る。人を呪うからつなるんだ。」

「うわああああああんん」

パシィイイン

泣きながらビンタされた。

お化け（？）にビンタされたよ、おい。

暫く貞子は、泣いてるので仕方ないので放つておく。

取りあえず、飯にした。

気がついたら、泣いてた貞子がこいつを見ているので、瞼つか？
聞いたり、食べるらしい。

彼女が来て一週間がたつた。

「なあ、俺死なないんだけど?」

「...?」

何驚いてんだ?

呪つたの忘れやがつてたな。

どつやうら、俺は死なないらしい。

一安心だ。

つうか、コイツ普通にいついてやがる。

住み着くはいいが、いや、あんまり良くないが、食費がかさむ。

いい加減働けと思つ。

呪イノビテヨ（後書き）

えー俺と貞子、略してオレサダいががでしたでしょうか?
エー感想とか、ドシドシください。
貞子かわいいー。とかの一言でもいいです。
ください。

恐怖ノ味噌汁

俺は、リビングでアニメを見ながら、ポテチを食べてる娘子を見て前から思っていた事を告げる事にした。

「なあ、ここの際、呪われたから、お前がいついてるのは、取り憑かれたとして我慢しよう。」

あ、ポテチが口のまわりについてるから、ティッシュで拭いてやる。

こべつ。

「でもせめて、飯食うなら働け。」

え？幽靈（？）だから、戸籍無いから履歴書作れないし、働けない？

ちつ、確かにその通りだ。

「じゅ、家事くらへ手伝えよ。」

こべつ。

意外と素直に頷いた。家事に自信があるのだろうか？

え？夕飯作るから、作ってる間決して覗くなつて？なんでだよ？

「恥ずかしい」

頬を紅く染めやがった。少しうざいが、ちょっと可愛かったのと言

「つとめにする事にした。

5分後。

キッチンから、ねしぬねし聞こえる。

ネシってなんだ?不気味だ

そこへ言へば、友人が貢子出できたのを教へられて、言つてたな

Tr
r
r
r
r
r_o

「もしもし、俺だけど。」

俺、俺、詐欺なら、間に合ひてゐる。

友が行き成りホケてきた
携帯にかけてんだから分かるだマニ

「きたぞ。」

「は？ マジか？ で、どうなつた？」

「今キッチンで、夕飯作ってる。」

—
•
•
•
•
•
—

• • • • • o

「妄想ならチラシの裏にでも書いてくれ。」

ガチャ

切りやがった。

まあいい、約束は果たしたし。信じられて、友人に見にこられても、今は面倒だ。

「で・き・た・よ。」

「うわ、行き成り耳元で話しかけるな怪奇現象め。」

バチイイイン

ビンタされた。

事実じやねえかよ。

ところわけで、食卓に着くと。

多分、ご飯と味噌汁だ。

多分つて言つのは、それっぽいだけで、まったく違う物だからだ。

いや、「」は彼女が生きていた頃の郷土料理かもしれない。

ご飯、否、薄く緑色に染まつた米を口に運んでみる。

この味わい、この匂い、まさしく。

「ふつ、」 ゾじゃねえか！…！」

バシイイイン！！

」 ゾ米吹いたらビンタされた。

食べ物を無駄にするな？ それはてめえだ。

ちなみに、」 ゾとは、緑色で油汚れに超強い強力洗剤である。

味噌汁は大丈夫だろ？と、思つて。いや、大丈夫だとは思つてないが飲まざるは得ないので、飲んでみた。

色は、黒である。

飲んだ瞬間、俺は意識を失いかけた。

「いつたい何入れたんだ、お前味見したのか？」

「え？ してない？ というか、そんなもん飲んだら死ぬ？

わざとかよ・・・・・。

「うつ、吐きそう。」

バシイイイン

酷い！…とか言ってビンタされた。

俺はその一撃に完全に意識を落とした。

明日、ここに料理を教えるかと思ったが、とりあえず、神社に行つてお払いしてもうおつかなと思った。

恐怖ノ味噌汁（後書き）

まあ、こんな無意味な（？）日常つてのもいいですね。
感想お待ちしております。

丑の刻参り

今日は神社に来ている……ちひると眞子もだ。

「トート……。」

「違つだんじて違つ。」

とつあえず、事務所に向かおう。

お、巫女さんがいる。

「あの、すみません?」

巫女さんに話しかける。

「なんでしょうか?」

「呪われてるんですね。」

「は、はあ……えーっと御祓いですか?」予約の方はされでますか?」

ちよつと引かれてしまつた……。

「予約なんてあるんですか?」

「はい、予約されますか?」

「はい、しまつ・・・ちゅつ、なにすんだよ」

貞子が俺をひっぱて来る。

そりや、自分が御祓いされるとなれば、慌てもするか。

「ねえ？呪われてるの？誰に？」

「おめえだよー！」

「えーっと、恋人ですか？」

「え、ちがい」

「はい、そうです。」

「ちょっと、待て！一頬染めて何言ひてんだ！一ちょっと可愛こじゅ
ねえか・・・じゃねえ！」

「恋愛成就のお札もあつますのでそちらもどうぞ。」

なんといつ商魂溢れる、巫女さんだ。

といふが、貞子を見て人間の恋人とか、大丈夫かこの神社・・・。

まあ、巫女なんてアルバイトとかだらうし、神主さんが凄い人である事を祈ろう。

「えーと、御祓いでしたよね、『予約されますか？』

「いえ、また電話で予約させてもいいます。」

眞子の前で予約なんてしても、邪魔されるだけだらうしな。

「帰るぞ。」

眞子に声をかける・・・・・・。

「いねえ・・・・。」

わざきまで、俺の服のすそ引張つてたくせに、いやしねえ・・・・。

このまま帰つてもいいが、なんだかたたられそつだ。

探してみるか・・・。

数分後・・・・・。

「んーんー」

俺は眞子を見つけた。

「んーんーんー」

一生懸命大きな石を動かそつとしている眞子、その石の下には・・・・・。

井戸。

「やめれ

バスンと後頭部をはたいてやる。

「ん、ん、！..」

「その井戸はもう使われてない井戸だからそつやつてんだ、どうすんじやない。」

「でも・・・」

「でもじやねえ、なんだ？井戸の中帰りてえのか？なら止めないが一度と俺の家にくるなよ？」

これで、追い出せるなら俺的に問題無い、放つておけばいいんだか51。

「うー。」

「うーじやねえよ、微妙にうええよ。」

「じゃあ、お金頂戴、500円。あ、やっぱ千円。」

「なんでだよ！大体ここに来るにもお前の身なりやべえから、それなりに整えてやつたんだが。」

ちなみに、彼女は、今日は綺麗な白のワンピースで伸び放題の髪をある程度美容院で整えてやつた。まあ、その時の話はまた後口だ。

「無駄に金ばつか浪費してゐるくせに、小遣こままでよ」せつて言つたの

か？」

「働くから……。家事とか……。次は頑張るから……。」「

「頑張つて俺を殺すつもりか？」

「ううう……」

「あーうくしょー、俺も甘こよなあ……。」

「つたく、しうがねえな、ホラ1000円。なんに使つんだかしらんが、帰つたら風呂掃除はお前がしろよ。」

「う・・・うん」

「あー、うれしそうな顔しやがつて。」

「で、何買うんだ……。」

てこてこ、販売所に走つていへん子。

あ、ひけた……。新品の服砂まみれにしやがつて、だから俺は黒い服にしりと……。

まあ、黒い服だと、雰囲気事態が暗いから、もっと暗くみえるんだよな……つと帰つてきたな。

「で、何買つたんだ？」

「ん……。」

これって、恋愛成就のお手伝い…………。

「お手伝い…………。」

俺のが縁で、貞子がピンクの持っている…………。

「あ…………ん…………。」

なんだ、待て…………ん…………あれか？

こいつ俺に気があるのか？

ちょっと…………ちょっと待て、こいつ俺を殺して来た化け物じゃねえのか？

は？

「んーんー」

「おー、これ…………つて待てーーー！」

貞子に手をやると伸び井戸の上の石をどかそうとしていた。

「やめい、あーもう、お前だけはわからねえ、帰るぞ、いつまでもそうやってんだつたら置いて帰るからな。」

「ま、待つでー。」

丑の刻参り（後書き）

お待たせしました。
え？待つてない？

まあ、待つてなくとも読んでくれた方ありがとうございます。
ちょっと今回はラブ多めでいきました。
次回もお楽しみに。

「これでいいか。」

俺は、ササを自宅マンションの窓からたらしていた。

こう見ても、四季の行事は大切にするほうだ。

こう、窓からたれるササニでは、風流だな。

「何？ これ、食べるの？」

貞子が来てアイスを齧りながらそう言った。
君最後の一個俺の分じゃねえかこの野郎。
ていうかそのガガリ

「お前さあ、仮にも昔の人の慣れの果て（？）だろ。七夕くらい知つとけよ。ていうかそのアイス俺のだよな？」

「ああ・・・・。そんな行事あつたよねえ」

「つたぐ、飾りつけ手伝えよ。ていうかそのアイス俺のだよな？無視してんじゃねえよ」

「じゃあ、短冊書くね。ボリボリ。」

アイス全部食いやがった。

「だからアイス俺にも一口くらこよせ………といふか短冊は最後だ、先にリングとかつけるよーーー！」

「リング！」

「そうだよ、リング。そこ折り紙置いてあるから、切って繋げて、作り方わかるよな？」

「まかせて、リングなら私におまかせ。」

なんという、満面の笑み。なんか妙な事に自信あるんみたいだな。

俺は違う飾りでも作るか。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

「ぼそぼそ」

貼り・・・・・。

「まわまわ」

むう、貞子が何かボソボソ言つてゐる。

丁度貞子の横にあるペットボトルのジュースを取る振りして、盗み聞きしてやう

「リングを作るリングの貞子・・・クククク」

「ぶつ・・・」

ジュース吹いた。

「・・・・・。汚い。」

「す、すまん。」

反則だらう、それは。

そんなこんなで、飾りつけは無事終了した。

「終わった。リング沢山つくった。」

訂正、貞子が、リングを10メートル以上作った事をのぞけば、無事だ。

「ああ・・・・・。ササが見えないくらい作つたな。うん。」

まあ・・・折角一生懸命作つたんだ、何もいわまい。

「後は短冊か。何書くかな、貞子は何書いたんだ。」

「秘密。むづきました。」

「この間のひこ

「なら、俺も秘密な・・・。」

貞子が早く成仏しますよ!ひこ

「ちよつ、待て見るなよ。おこ。いふつーー勝手に見て怒つてると
じやねえ!!」

「塗り潰すな、ちよつ、そのままであるかな・・・。」

むづと仲良くなれまよひこ

貞子

眞子が早く（ぐわく ぐわく ぐわく ぐわく）と塗つ（ぬ）られて（の）
(裏面)（ひらめ）

眞子がもっと笑つ（わらつ）なつまよつ。

七夕星願祭（後書き）

今回は、割とラブ多田？多田かな？

次回あたりは、シリアス多田でいきたいんだけどそんなの求めてない？

読者さんからシリアスも読んで見たいとか言つ声があれば、書きたいと思います。
感想よろしくー。

「頼むこの通りだ。」

俺は、久しぶりに顔をだした大学で友人に頭を下げられていた。

「お前だけが頼りなんだ・・・。」

そう言われても困るんだが。

そんな事を思いながら、何故こんな事になつたのか思い返していた。

「秋だな。」

「いきなりだな、友。まあ、確かに秋・・・いやもう冬が近いが。」

「秋と言えば、恋の季節だな。」

「あー、それは春じゃねえか?」

「いやいや、いつも心身共に冷える時期、心と体を温めあつ季節。恋の季節だらつ?」

「いや、お前それ、夏にも似たような事、言つてたじやねえか。」

この友人、いい奴なんだが女好きなんだよな。

「それは、それ。これはこれ。つてやつた。ともかく、今は恋の季節なんだ。」

「わかつた、わかつた。恋でもなんでも好きにすればいいだろ。」

「でさ、合コンの話だけど今度、知り合いの大学のお嬢さん方とすることに決まつたんだが・・・。」

「なにが、でさ、なのかは、分からぬいが、それは良かつたじやないか。」

「で、一人男のメンツが足りないんだが・・・。」

「いや、俺バスで。」

「待て最後まで話を聞け、今度は前みたいな事はない。絶対だ。」

以前こいつの誘いで顔をだした合コンでは・・・・・・・・うん、思い出すのはよそう。

「お前がどう言おうが、俺はバスだ。」

「だから、話は最後まで聞け。なんと今度は神道科の女の子達なん
だぜ！」

「だか、ひびつした。」「

「お前馬鹿だらつ、いや馬鹿だ。神道系即ち、巫女さんだぜ即ち清らかな乙女だ……」「

言いたい事は分かるが、ここには夢見すぎじゃないだひつか。

「いや、わるいナビ、鬼に角バスだ。」「

「頼む」の通りだ、お前だけが頼りなんだ。」「

と言つわけなんだが。

まあ、正直別に合口くんへりこ付か合つてやつてもここんだが……。
「お前だつてフリーなんだから、巫女さんの彼女が出来たら嬉しいだろつ?」「

フリーか……。思い浮かぶのは眞子……。

いや、あれは彼女じゃねえよな。うん、まあ、違つ。

「まあ、すぐに返事をくれとは言わん、来週の金曜までに返事をくれれば構わん。それまで少しくらい考えててくれ。」「

「考えるくらいならいいが……。」

まあ、確かに人肌恋しい季節。貞子みたいな凶太い女（？）に擦れた心を、優しい巫女さんに癒してもらいたくないと言えば嘘になる。

「とは、言つたものの、どうしたもんかな。」

友人との話を終え、玄関のドアを開けながら呟いた俺は、玄関の向こうにいた存在に・・・。

「・・・・・・・・・・。」

絶句した。

「はらいたまえーきよめたまえー」

巫女貞子だ。

「どこから突つ込んだらいい？ 格好か？ 棒読みか？ それともお前はエスペーか！ ！ みたいなのか？」

「駄目？」

なにが駄目なのか、駄目か良いか言つたら・・・・・・・。

長い髪。白いうなじ。赤い袴。

ふ
・
・
・
不本意ながら良いとしか言えないが。

「だつたら。。。良いでしょ。。。」

いや、だからお前はエスパーが、心を読むな

私には超能力がいたの

は？

確かに超常現象の長たるお化けである貞子なら超能力のひとつや二つあつてもおかしくない『氣もするが、いやでも超常現象とお化けて別ジャンルな氣がする。

۷۰

貞子が差し出した紙を見る。

「どうやら、このサイトを印刷した物らしい。」

サイト名はWEE KEY 私たちの鍵と言う辞書サイトみたいなもので、貞子の欄が印刷されている。

どうやらそれによると、貞子が呪いで心臓麻痺を起こす方法はサイ

「キネスによるものりじご。

「なるほど、お前はただの呪いのお化けじゃなくて、サイキックお化けだったわけだ。」

サイキックゴーストのほうが「ロゴ」がよきものな氣もする。

「違う、サイキック都市伝説つい呼んで。」

なんだ、その「だわりは。

「それで、心を読んだにしても、その服装はどうした・・・。」

「私はもともと不定形な想像の産物だから、姿形を多少えるのは、簡単らしい。」

「だったらこの前、買った服意味ねえじゃねえか。しかもらしい。つてどういつ意味だ。」

「前は出来なかつた。うらしく、つて言つのは、隣の高校生から聞いた。」

このマンションの隣?空き部屋だったと思つたが誰か入つたのか。てこつが勝手にお隣さんと交流して尚且つ正体ばれてんのかよ・・・。

「なんで、よりによつて巫女なんかとか聞きたいナビもつここや。飯の準備するからテーブルかたづけとけよ。」

「遠視と遠聴・・・。」

「え？ 何？」

「なんでもない、夕飯の準備なら出来てる、カレーだけど。」

「は？ いやお前の料理のレバは・・・・、あ、でも良い匂い。いやいやでもだまされないぞお前の殺人料理は・・・」

おまけ

ちつ・・・意外と・・・・。美味かつたよな。

しかも、風呂掃除もしてあつたし。

遠視と遠聴つて・・・・遠くの物を見聞きするつて事だよな。

ということは俺の様子を見てたわけか。後で注意しどかなくちゃな、覗かれてるつてのはいい気分じやな。

でもまあ、合コンの件を聞いて巫女衣装つて事は・・・・。

あー、考えるのめんどくせえ。

送信BOX

宛先 友人

件名 合コンやつぱり無理

本文

んな事されたら、 いけるわけねーだろ。

後日友人に当然のごとく意味不明だと言われた。

超常現象巫女都市伝説（後書き）

お久しぶりです地軸です。

今回のメインは友との掛け合いと、伏線です。

最近きづいたんですけど。

主人公の名前が無くて困っています。

このまま最後までなしでいくのか。

いきなりだしちゃうのもどうなんだろうかとか悩んでます。

ちなみにほかのサブキャラクターには名前があります。

一人にいたつては名前がでてます。

次回あたりにその名前が出てるサブキャラの名前についても触れてみたいですね。

彼乃名巴友人。

「おー、トモヒト、まじで俺の家くんのか？」

「…………。」

「やめとけって、ホラ、トモヒト今日バイトある日だつたろ？やめとけって……。おい聴いてるのかトモヒト……友人！！」

「あー、ああ、オレか……カタカナで呼ぶから誰かとおもつた。」

「は？ かたか……そういうメタい事言つな。」

「まあ、それはともかく、今日はバイト先が改装で休みだからな、つーかお前の同棲相手見るまで帰れないからな。」

「なななななな、なにを言つてるんだ、同棲なんてしてねーよ。」

「

「」の前、お前の家の隣に高校生引っ越してきたら？

「ん、ああ。」

「あれ、オレのバイト仲間。聞いたぜ、長髪色白美人が居るって。なんでオレに黙つてるかなあ・・・。」

「いや、一応報告したんだけどな・・・。」

「は？ 聞いてねえよ、そんな事聞いたらその口に見に行つてねつて。」

いや、貞子が出てきて、飯作つてゐつて言つたんだけどなあ・・・。

「つか、お前にもついに恋人か・・・。」

つーかどいつもく・まあ・・・ばれねえよな。部屋までつこりまつた
けど・・・。

ガチャ。

「ただいまー・・・・・。帰つても・・・・。」

「おじやま・・・・・。」

ドアの扉を開けたそこには、顔たのは・・・。

クル・・・・キットクル・・・

つーかこの曲どうから流してるんだうつな・・・。

「キットクルキセツハシロッカー」

デフォルト貞子（恐怖バーチャル）が歌つてた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

叫ぶトモヒト。

してやつたり顔でニヤニコする貞子。

なんだか、こんな事にもなれつつ妙に冷静な俺。

「あーうん、紹介する、一緒に住んでる貞子だ。貞子、友達のトモヒトだ。」

「は？ さだつ……貞子つてあの？え？ は？」

混乱は無理もないだろ？ まあ常人なら信じてもくれないだろ？ な……。

「はあ……え、まさか、なるほど……あの時やつた、あーあー。」

ぶつぶつ言つてゐるトモヒトをひっぱりながら家に入る俺。

奥に引っ込んでいく貞子。

「あー、でもアレって結構前の話だぞ？ なんでお前死んでない？ おかしくね？」

そう常人なら信じてくれないだろうが、トモヒトは残念ながら常人じやなかつた。

無意味に良い柔軟な適応力をもつてゐる、まあ、だからこそ俺もこいつなら貞子にあわせてもいいと思つたわけだが。

「なんか、デッキが壊れて、戻れなくなつたらしくてな……。そのままいついた感じ。」

「なるほど、超常現象がパターン外の出来事に対応できなくつて、

例外的な状況がおきたわけか・・・。」

さすがトモヒト、小学生の時に夏 怪談 女の子にだきつかれる、
と言う思考だけで1万の怪談を知り何故か若干の霊能力まで手に入
れた男だ。

「粗茶ですが・・・・。」

お茶を入れてきた貞子。

「あ、どうもお構いなく。」

受け取る、トモヒト・・・・相変わらず「いつの適応力はすげ
え。

「で、貞子さんは、ここにまで行つてるんですか?」

「ブー――――――!」

盛大にお茶を吹いた、こいつ適応力高すぎだろ、

「汚い・・・。」

布巾でテーブルを拭きながら、仕方がないんだから・・・みたいな視線を送つてくる眞子。

「ていうか、トモヒトニコソサシナシウジョウザンショウ」

「都市伝説

「都市伝説なんだぜ?ビートルスもなにもねえよ。」

つたぐ、トモヒトは何勘違にしてやがるんだか。

「・・・・・・・・・いや、今のお前らのやり取り見てたらなんの説得力もねえぞ。」

トモヒトはなんか、めんどくさい話題でつぶやく。

「は?」

「じゅあお前は、やのビートルスもなにかうじょ「都市伝説

都市伝説がいれたお茶を受け取って飲んで呑いて拭いてもらつてゐる
わけなんだな・・・。」

それが・・・なんだっていつんだろつか?

「わからんねえかなあ、お前らしげにひしゃお前らしげが・・・となる
と合コン断つたのも彼女のせいか・・・、まあしじょうがねえか、
眞子さんこいつ、いろいろと手がかかったり、鈍かつたり迷惑かけ
ると思いますが見放さないでやつてくださいね。」

「は?」

何言つてんだこいつ。

「任せとこヒ」

眞子も何言つてんだこいつ。

「うふふ、お前らこいつ加減にじろりよ。」

「で眞子さん、ここつむのなつそめとか、のうけとか、色々おしえ

てもらひえませんか？

トモヒトが俺をスルーする・・・悪友の顔をしていた・・・。

「いいわ・・・・・・あれは10年前のこと」

ちゅうとまで10年前にはお前にはあつてないわあああ。

いろいろ突つ込むがスルーされる俺・・・。

とつあえず、お茶を飲み干して落ち着いつと湯のみに手をのばし飲み干す。

「と鹽づじことがあつてね・・・。」

真実と嘘を混ぜながら鹽の眞子、いやあきらからに嘘の方が多いくな、

とぽとぽとぽ・・・・・・何故か、何故かじく自然に空の湯飲みにお茶をついたしてくれる眞子をみながら・・・。

「でしょ」こつ馬鹿だから。」

笑つて眞子と話すトモヒトを見ながら・・・。

こいつを眞子に会わせてしまったなあ・・・・・なんつて思つたつした。

彼乃名巴友人（後書き）

どうも、オレサダアップしてみましたー。

ていうかマジスランプ、スランプさんぱねえっす。

というかね、俺の周りネット友達も含めて小説読む奴いない事いな
い事。

スカイプとかでネタの相談してものつてこない事乗つてこない事。
だれか、俺と小説ネタについて語りませんか？

それはさておき、今回は、前からでていた友人ことトモヒト君のお
話です、友人と書いてトモヒトと読む。
ごめんそれだけのキャラです。

ちょっとといい話風に仕上げてみました。
主人公の名前はどうしようか・・・・・一応ずっと出さないつもり
ではあるんだけど、不便なんですよね。
そのあたりの感想もいただきたいです。
もっともっと感想ください。読んでくれてる人がいるのかどうか不
安になります。

またたり更新ですが、みはなさないでね。

「『タツはーいね、タツはリーリングが生み出したなんとかなんとかだよ・・・。』

「お前や、見たアニメに影響されたのやめね？」

「そんなわけで、俺と貞子は、タツはこいつで蜜柑を食いながら王アなんぞ見てたりしてた。」

「つか、同じ場所にはいんな、対面とか違うといひに入れ。お前の足つめたいんだよ。」

「寒いからやだ。」

超常現象の癖に生意氣な。

『ルーン』ーくなー

「携帯なつてるわ・・・貞子、携帯ひつて。」

「はー。」

貞子から携帯を受け取り、番号を確認すると、知らない番号。

「もしもーし」

とつあえず電話に出てみた。

「・・・間に合つてます。」

俺は、それだけ言うと電話を切つた。

「なんだつたの？」

疑問符を浮かべる貞子に

「次かかつてきたらお前出ろ。」

と書いて携帯を差し出す。

「いいの？」

普段携帯とか電話にださせずに居たから、皿をリンリンと輝かして電話を受け取る貞子。

ざーんじくーなー

チャクメロが鳴り貞子が嬉そうに、電話に出る。

受話器に耳をあて数秒後。

貞子が「ひらひら」をみて、なんとも言えない表情をして・・・。

「ま・・・間に合つてます。」

俺と同じ台詞をなんとか吐いて、電話を切った。

「どうすんの・・・。アパートの前にいる感じこと・・・。」

疲れた表情で貞子が俺に聞いてくる。

「「ひらひら」が聞きたい。」

「そーんじーくーな

無常にも鳴る電話。

「出ひよ、貞子・・・。」

「せだ。」

嫌らしく・・・。仕方なく俺が電話に出る。

「私メリーサン今貴方の後ろにいるの。」

不味い！部屋の前にいるの、がもう一回分あるとおもって油断していた。確か後ろにこられたら・・・とそこまで考えた瞬間、貞子が凄い形相で後ろをふりむき・・・。

ドンー！

と言ひ音がした。

俺もあわてて後ろを振り向くと、金髪の幼女が、貞子に頭をシャイニングファインガーされて壁にめり込んでた。

「貴方は死なないわ、私が守るもの。」

貞子が妙な微笑みを浮かべて言ひ。

「電話に出る前にその台詞を聞きたかったわ。」

正直かなり焦つた。

「私が隣に入つてて良かつたでしょ。」

「タツに入りっぱなしで、起きた一連の出来事、妙にひつひつしてくるこいつを邪険にできなくなつてしまつた。」

「そんなことよつ、」^{ハリハリあるつ。}

壁にめりこんでる幼女見て言ひ。

「簾巻きにしてすてましょ。」

「ロープなんかないぞ。ガムテでいいか・・・。」

俺はガムテープで、幼女をぐるぐる巻きにして・・・なんか犯罪者な気分だ・・・アパート備え付けの「み収集所にぶちこんでおいた。」
例え幼女と言えど、超常現象に優しくする言われば無いのである。

「寒い中外に出でさせやがつて。」

戻ってきたら貞子が壁を補修してた。最近なかなか、細かい事に気づくようになったのである。

まあ、命も助けて貰つたわけだし、撫でてやるう。

撫で撫で。

うれしそうにしてる視線が妙に可愛かつたので手をとめ、「まかして、コタツに入る。

つて、なんで俺は貞子の隣に入つたんだ・・・。

撫でると言わんばかり（実際言つてゐる）頭を差し出してくる貞子。

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○

撫で撫で
・・・。

撫で撫で・・・・。

夜はふけていく。

滅璃威来襲（後書き）

久しぶりに書いてみました。
最近エヴァにはまつたので、ちょっとぴりエヴァ仕様。
感想まつてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282d/>

俺と貞子（オレサダ）

2010年10月9日15時49分発行